

俳句雜誌

空

空

平成30年10月31日発行

第16卷5号

通巻第81号



2018・10・11

SORA 81号

長崎 松尾龍之介

方言にもどる神官山開き

金魚田を溢れしめたる昨夜の雨

アナログの時計なるべし時計草

片陰の凹凸に添ひ歩きけり

麦飯は胃の腑にやさし隠元忌

福岡 永淵 恵子

山開僧兵太鼓闇を打つ

闇を縫ふ松明二千山開

大山道夏蝶の湧くひとところ

まなかひに夏の大山したたれり

大山の表も裏も見て涼し

福岡 田代 貞香

水打つて夜の中洲の光増す

麦秋や独り所帯の鍋小さき

藍浴衣ピン一本で髪を結び

たつぷりと雲を映して夏の川

十葉に埋もれて一人暮しかな

兵庫 青木 朋子

更衣猫に世相を愚痴りつつ

贈られしおしやべり好きなきくらんば

ハンカチを探るそろそろ泣きさうで

読み継いで真夜となりたり時鳥

亡き母も父も居るなり蚊帳の中

福岡 あさなが捷

兵庫 大西乃子

当番で守る庚申稲の花

田を植ゑて退屈さうな雲一つ

傘捨てて台風めがけ走り出す

背信よ雨にはなやぐ濃あぢさゐ

八月の空整列の肩細し

飴玉のまはつて来る端居かな

ふる里はダムの底なり孟蘭盆会

万緑や形見の中に臍の緒も

銃声の後のしじまや紅葉谷

万緑やこめかみに来る脈の音

大阪 田岡千章

北九州 児玉充代

短夜や栞はきのふをそのままに

考ふる力うするる溽暑かな

花南天鈴の音色に鍵の束

石ひとつ除けし流れや田植時

ガンジーの貌に角出て蝸牛

挨拶もうしろ向きなる草刈女

睡蓮を数ふ一からまた数ふ

草笛や歩けば光る水辺の樹

地震去りぬ泡ひとつぶに水中花

末席は欠伸しやすき冷房裡

北海道 押田裕見子

長生きの女の家系花燃ゆる
死仕度するには早し衣更ふ
身の火照り隠しきれざる夏の月
蚊遣火のやがては灰になろうとも
さよならも言へず別るる大暑かな

兵庫 えとう樹里

そのへんにスパイ居さうな夏の夜
母の家あちらこちらに水を打つ
老犬の大きな息や油照
曇天が濃紫陽花まで下りてくる
葉桜や降り来ることばを待つてをり

宮崎 田代民子

五体いつもどこか痛みて半夏雨
団扇の風では用成さぬ立ちくらみ
蚊喰鳥灯すほどでもなき暮色
牧水の歌碑南端の青岬
叔父叔母もこの世を去りぬ端居かな

東京 遠山のり子

風になる潮の香りや月見草
湧き水の育む草に夏の蝶
鴉の子とんとんとんと路地歩く
風が風追ふ千枚の青田かな
犬と話す人と行き交ふ夏夕べ

北九州 横田敬子

海岸の石の腐食や花海桐

はまなすや海辺に残る化石群

白南風や潮の匂ひのカフェテラス

空つぽの路線バス行く麦の秋

信号を渡りてゆきぬ夏の蝶

福岡 三井所美智子

比古婆羅にほのかな紅やみくじ結ふ

山滴る注連新しき天狗杉

狛犬の台座に白き苔の花

ターザンに渡そか英彦山の藤の蔓

糸とんぼ鎖囲ひの井戸の跡

兵庫 岩井京子

行水の幼子や母見上げつつ

日々振れゆくさま楽しねぢればな

夏草の名を一つづつ教はりぬ

見られしと気づくざりがに後退る

米茄子の太きを縦に真二つ

東京 山田正子

朝ぐもり巣箱開けたる鳩時計

祭笛路地の奥まで誘ひ出す

夜店の灯色くどき物照らしけり

金魚売り足し水もらひ帰りけり

寺町の湯屋はギヤラー夏つばめ

直方 吉田悦子

春の昼工場にはづむ釣り談義
山国の人は優しきいぬふぐり
卯波立つ宮へいざなふ朱の鳥居
ややこしき話となりぬ心太
梅雨空を眺めて靴を選びをり

兵庫 林 徹也

ハモニカの白布ほどく父の日よ
白南風の朝百歳のカプチーノ
百段の先は結界青嵐
名水のはらに沁み入る雲の峰
涼風のほか何もなき天守台

神奈川 窪みち子

夢醒めてくちなしの香の残りけり
野鳩らの声くぐもりて梅雨木蔭
随道の出口緑の盛り上がる
朝顔鉢提げ角帯と文庫帯
ムツクリの響き翁の髭涼し

東京 今井康子

貝殻を見せに走り来水着の子
大夕焼父と子海へ歌ひだす
見つくれば次々見つけ青胡桃
男傘借りて家路や大夕立
いつまでもラッコのごとくプールかな

空集抄
柴田佐知子抽出

能面に死相のありて青葉の夜

高倉和子

パンプスの上司近づく油照

吉田 葎

足の甲子蟹が越えてゆきにけり

岸 洋子

蒲団干す母の匂ひをそつと嗅ぎ

小林 朱夏

揚花火果つといふこと今更に

中田みなみ

プールより上がる引力総身に

永淵 恵子

アート展出で緑蔭に息を吐く

山内 碧

寝転べば風の這ひくる籐筵

曾根富久恵

闘鶏の軍鶏も男も河内弁

角野 良生

簾してノアの方舟めく家居

青木 朋子



梅雨茸秘すべき事のなくなりし

汐の香の橋に灯の入る祭かな

隣人のやうな山並昼寝覚

蹴る妹に加減せぬ兄夏休み

溪覗き朴の香りに包まれし

夏蜜柑置けば隠るる島ばかり

日焼の子絆創膏の振れをり

うたた寝の母は還らず青簾

湯上りの叱らるるまで裸かな

しろがねの色を残して蛇の衣

祭笛聞こゆる村に帰り来し

東京の夜風はあまし夏柳

大西乃子

深川淑枝

戸栗末廣

苑実耶

河原敬子

山本則男

仲里奈央

林徹也

森田明成

石橋幾代

織田高暢

えとう樹里

運動会後かたづけも競ひをり

朝顔の紺まつさらなもんぺ穿き

紫陽花を切り詰めし夜の雨の音

老ゆるほど心ひらけとねぶの花

雁渡しむかし訃報は恭しく

羅を着こなし人を寄せつけず

叶はざる夢を追ふ夢昼の蝶

さくら貝音信絶てば忘れられ

アイスティーに口つけぬまま恋終る

鍬の柄に楔打ち込む半夏かな

遠雷やひとりの夕餉すぐ終る

蜘蛛の罫を壊して朝の菜を採りぬ

後藤園子

原友子

村上二三

田口萬智子

あさなが捷

田岡千章

押田裕見子

吉田悦子

宮川正彦

横田敬子

岡村尚子

星加鷹彦



夫と言へど貸あい借りは無し心太

茄子漬けや入山規制のかかる村

素麺流し子がつひに指入るる

遥かより身を抜けてゆく青田風

芋焼酎亡き父褒むる人が来て

祇園祭ずつと爪先立つて見る

盆踊り炭都に響くやまの唄

簡単服肩のほかみな身を離れ

笹にくるみ籠に寝かせて鮎届く

雀の子走り慣れたる寺の屋根

代掻きや亡き父牛を引き廻し

山笠を昇く骨の軋める音聞こゆ

荻 悠子

古賀 真理

小島 翠波

本多 トミ

岩下 きぬ代

村上 典子

日高 孝

岩井 京子

松田 明子

田代 貞香

立花 一枝

倉智 万数雄

空作品評

柴田佐知子

パンプスの上司近づく油照

吉田 律

仕事をしていると後ろから足音が聞こえる。自分の方へ近づくカツカツと歯切れのいいヒールの音。誰かは振り向かなくても分かっているのだ。下五に配される季語が勝負を分ける。〈油照〉とは面白い。この女性上司は手強そうだ。〈パンプス〉〈上司〉〈油照〉という言葉の取り合せによって臨場感ある切れのいい句となった。

私が支店の総務経理の責任者を務めていたころ立場上、不備を指摘することが多かったため、近づくだけで不安がられた。一度は横を通ろうとしただけに、課長が椅子から飛び上がった。そんな怖がらなくても大笑いしたことを思い出した。自然に遠い職場を詠むのは難

しいが、律さんは無機質な空間にも人間という生き生きした素材があることを見せてくれた。

忙しくて吟行にいけないから、或いは病で臥しているから自然に触れられず、俳句が出来ないと悩んでいる人がいれば、考え直す必要がありそう。俳句を詠むとき、時空の中心は、生きて感じて考えている「我」である。歳を重ねて外出もままならなくなっても、今まで見てきたものや経験の蓄積があるはずだ。これは貴重な宝だ。これに自在な想像力が加われれば、自分を心にした無限の空間が広がってゆくと。まずは「私は自在だ」と思ってみることだ。どのような状況であろうと、与えられた命をどのように使いきるかは自分次第、一瞬一瞬を大切にすることが俳句を詠むことに通じていると思う。そのような一瞬を切り取った秀句をあげる。

足の甲子蟹が越えてゆきにけり

岸 洋子

小さな蟹だ。洋子さん足の甲をサワサワと横切っていたのだ。小さな蟹の命が、感触としてまっすぐ伝わってくる。〈以下略〉

空集

柴田佐知子選

能面に死相のありて青葉の夜

福岡 高倉和子

息つめて夏草の中通りけり

ふるさとや寝転んで見る天の川

蚊帳吊れば納戸の匂ひしてゐたり

竹婦人出番なきまま色変はる

昼寝覚母のなき世に戻りけり

日輪の芯の黒さや原爆忌

炎天の砂場に立てる赤シャベル 粕屋 吉田 葎

泣きながら子がざり蟹をふり上ぐる

大寺の裏手に吊す浮輪かな

日当りて風鈴の音の濁り出す

川床遊び吐息めきたる京ことば

相聞の歌の真中を紙魚走る

パンプスの上司近づく油照

きつぱりと断られたる涼しさよ 福岡 岸 洋子

人去りて海匂ひけり夏座敷

ぐいと川曲ぐる大岩灼けてをり

足の甲子蟹が越えてゆきにけり

錆び鉄鎖磬に食込む梅雨最中

掌に余る下足の木札どぜう鍋

大見得をきつて果てたる夏芝居

鶏の声裏返る猛暑かな

手が止まる微分積分雲の峰

蝸や遺影が並ぶ母の家

秋の昼母がつぶやく己が歳

稜線の少し沈みて柿熟るる

鱸酒や女所帯に慣れて久し

蒲団干す母の匂ひをそつと嗅ぎ

鉄骨に真赤な月や出水引く

打水や路地の稲荷に風曲り

東京 中田みなみ

糸島 小林朱夏